

## 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 17 日現在

機関番号：84301  
 研究種目：若手研究（B）  
 研究期間：2011～2012  
 課題番号：23720339  
 研究課題名（和文）足利尊氏願経の原本調査を中心とした中世一切経の資料的研究  
 研究課題名（英文）Material investigation about Issaikyo(the complete Buddhist scriptures) of Japanese medieval period, with a focus on research of Ashikaga Takauji Gankyo  
 研究代表者  
 羽田 聡 (HADA SATOSHI)  
 独立行政法人国立文化財機構京都国立博物館・学芸部企画室・研究員  
 研究者番号：30342968

### 研究成果の概要（和文）：

足利尊氏願経とは、足利尊氏（1308～58）が後醍醐天皇や亡母・戦没者の供養などのため、文和3年（1354）に発願のうえ、全国の寺院に命じて書写させ、園城寺へ奉納された一切経である。本研究では、これらの網羅的な収集と原本の書誌学的な検討をつうじ、5500巻におよぶ一切経を書写するさいに用いた底本、書写に関わった寺院と地域、地域ごとにおけるに書写形態の差異ついて明らかにした。

### 研究成果の概要（英文）：

Ashikaga Takauji Gankyo is Issaikyo(the complete Buddhist scriptures), desired by Ashikaga Takauji (1308-1358) at 1354, as memorial service for Emperor Godaigo and Takauji's mother and the war dead. This Issaikyo was copied by national temples and dedicated to Onjoji temple. In this investigation, through systematic collection and bibliographic study, I elucidated about a kind of the original text, a differences of temples and region, a form of copy.

### 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	1,000,000	300,000	1,300,000

### 研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学

キーワード：史料研究・室町幕府・写経と版経・資料論・書誌学

#### 1. 研究開始当初の背景

##### (1) 一切経研究の現状

仏教典籍の総集である一切経を用いた研究には、

- ・仏教学（どのように請来した仏典が受容され、変化したか）
- ・国語学（どのように寺院の各宗派で独自の訓点を付し、読まれてきたか）
- ・歴史学（どのような人が作成に関与し、用いられてきたか）
- ・書誌学（どのように作成されたか）

など、さまざまな分野からの視角が存在する。この動向を本研究の申請者が眼目として見える歴史学と書誌学から眺めるとき、古代、

とりわけ奈良時代にあつては一切経の書写が国家的なプロジェクトと位置づけられていたうえ、正倉院を中心に実物、および関連する資料が豊富であるため、研究はさかんで、国家史や写経史から多くの成果が報告されている。また、平安時代においても、科学研究費の補助金をうけることで、松尾社一切経（3545巻、重要文化財 妙蓮寺所蔵）や中尊寺経（4296巻、国宝 金剛峯寺所蔵）、金剛寺一切経（約4500巻、金剛寺所蔵）の悉皆調査が行われ、次第にそのすがたが明らかになりつつある。

では、中世においてはどうかといえば、色定法師一筆一切経（4342巻、重要文化財 興

聖寺所蔵)や北野経王堂一切経(5048巻、重要文化財 大報恩寺所蔵)、または本研究で対象とする足利尊氏願経(以下、尊氏願経と称する)のように著名なものが現存している。しかし、これらを積極的に利用した研究は少ない。

### (2) 足利尊氏願経の位置づけ

尊氏願経とは、室町幕府初代将軍・足利尊氏(1305~58)が後醍醐天皇や尊氏の亡母、元弘動乱の戦没者を弔い、衆生の安穩を祈願するため、文和3年(1354)に発願し、諸寺院に命じて書写させた一切経である。これを日本における写経史、とくに一切経の歴史から見ると、南北朝時代以降は中国・宋や元、高麗の版本が多く輸入され、国内での書写による作成はほぼなくなるため、写経から版経へという流れのターニングポイントに位置するといってもよい。と同時に、尊氏がこれだけの事業をなしとげた組織力、さらには尊氏の築きあげた基盤を継承した足利氏、あるいは室町幕府が何故、さきのような選択をしたのかを制度史、対外交流史の面から検討する必要があると考える。

### (3) 一切経の資料的可能性

かように尊氏願経は、写経史だけでなく、室町時代の制度史や対外交流史とも密接に関係する重要性を有するにもかかわらず、研究があまり進捗しない背景には、

A 古写経の研究が主として奈良から平安時代を対象としている点

B 一切経を資料としてどのように活用するかという認識を共有するにいたっていない

ことがある。そのなかにあって、近年、寺院における智の集積たる聖教に関する資料論が提起され、Bに関する方向性や有用性が検証されはじめ、Aの状況は再考されつつある。

これを踏まえ、本研究においては、尊氏願経の書誌学的・歴史学的な考察から、「一大事業である写経からどのような中世史像が描けるか」との着想を得るにいたった。

## 2. 研究の目的

### (1) 尊氏願経の原本に関する考察

尊氏願経は、これまで『大日本史料 第六編之十九』(東京帝国大学、1922年3月)、『足利尊氏寄進願経現存目録』(京都仏教各宗学校聯合会、1934年9月)、『三井寺所蔵足利尊氏一切経目録』(園城寺事務所、1954年9月)で目録化がなされており、『三井寺所蔵足利尊氏一切経目録』には石田茂作の概説が掲載され、装幀、底本、書写の方法についてのべる。しかし、これらに掲載される情報は、經典名・千字文・奥書・発願文の種別

のみであり、表題および首題と尾題などが記載されていない。

管見の限りでも、表題に付された記号＝「以」字点の有無により、底本の判別は可能であると考えられる。したがって、本研究では主要機関所蔵分の調査を行い、今日的な書誌学の基準に則り、原本に残された情報を正確に把握することで、石田概説を再検証するとともに、以下の(2)および(3)の布石とする。

### (2) 尊氏願経と当該期における政治および社会状況との関係に関する考察

尊氏願経に関する専論は、島谷弘幸「足利尊氏願経」(『古筆学叢林』第2号、1989年12月)、生駒哲郎「足利尊氏発願一切経考—尊氏の仏教活動と一切経の書写—」(『東京大学史料編纂所研究紀要』第18号、2008年3月)と意外なほど少ない。いずれも石田概説をもとに、尊氏の信仰や宗教政策について傾聴すべき意見を提示するが、本研究ではそれ以外の見方をこころみたい。具体的には、書写寺院の地域的な偏差から政治および社会状況との関係、(1)で得られた情報から推測しうる経済的な賦課のあり方を関連資料より裏付けることで、尊氏がこの時期に一切経を発願書写させた真意を考察する。この点について、広く衆生の救済を謳う願意からは、「徳政」という概念との関係を想定しておくべきと考える。

### (3) 尊氏願経の中世一切経における位置づけに関する考察

足利尊氏以後、室町幕府は書写による一切経をやめ、すべてを輸入の版本に頼りようになる。この点は、装幀の面から足利尊氏願経が特殊な存在であったとした石田概説の指摘とも通底するといえる。ここでは現存する他の一切経との比較、それに関連した資料から、特異性が何に起因するかを考察する。あわせて、(2)で想定した「徳政」概念がどれほどの有効性を持ちうるのかを検討する。

## 3. 研究の方法

### (1) 仮目録の作成

現在までに目録化された『大日本史料 第六編之十九』(東京帝国大学、1922年3月)、『足利尊氏寄進願経現存目録』(京都仏教各宗学校聯合会、1934年9月)、『三井寺所蔵足利尊氏一切経目録』(園城寺事務所、1954年9月)を収集する。あわせて、太平洋戦争後の売立目録には、尊氏願経が掲載されることがままあるため、それらの検出を行う。これらをもとに、記されたデータを入力することで、仮目録を作成する。

## (2) 調書の作成と仮目録の補訂

尊氏願経は現在、園城寺をはじめ諸方に散逸しているため、主要機関所蔵分については可能なかぎり調査、および写真撮影を実施する。そのさい、申請者の勤務する京都国立博物館所蔵の6帖をはじめに調査することで、調書に記載すべき項目を【表題】・【「以」字点】・【千字文】・【首題】・【尾題】・【奥書】・【書写寺院】・【書写・校訂】・【発願文】・【書き出し】・【半面行数】・【法量】・【所蔵・典拠】・【目録1】・【目録2】・【大正蔵】・【備考】と決定した。最終的に、経典には一つずつ通番を付し、これらの項目を入力し、仮目録の大幅な補訂を行う。

## (3) 関連する資料の収集と考察

(1)の網羅的な収集、(2)で行った原本の書誌学的な検討をつうじ、膨大な数の一切経を書写するさいに用いた底本、書写に関わった寺院と地域、地域ごとにおける書写形態の差異について明らかにする。

## 4. 研究成果

### (1) 現存状況

尊氏願経は、『仏観禅師語録』における此山妙在(1296~1377)の序文および東陵永瑛(?~1365)の跋文、『三井続灯記』・『源威集』の記述から、足利尊氏が文和3年に母・上杉清子の13回忌および戦没者の供養などのため、諸寺院に命じて書写させ、園城寺に奉納された5500巻ちかくにおよぶ一切経であることが知られる。しかし、時間の経過とともに滅失と散逸を繰り返しかえし、全体像を把握することが非常に困難となっている。

こうした状況にかんがみ、各所に所蔵、あるいは刊行された図書類に掲載される尊氏願経を精査した結果、798点が確認できた。もちろん、今後も新たな尊氏願経が見いだされる可能性はあるが、全体像の把握につとめたのは、本研究がはじめてである。このうち、母体数のもっとも大きなものは園城寺所蔵分であり、その①員数、②散逸の時期についても新たな知見を得た。

#### ①員数

園城寺の所蔵する足利尊氏願経は、昭和9年(1934)正月、592帖が旧国宝に指定された。しかし、その後に刊行した『足利尊氏寄進願経現存目録』では563帖、『三井寺所蔵足利尊氏一切経目録』においても587帖を掲載するにすぎず、不足分が生じている。また、平成13年(2001)10月から11月にかけて、大津市歴史博物館が行った調査では、591帖と残欠が2帖・2巻あることが報告され、逆に過分が生じた。

この背景には、昭和36年前後に修理がなされていることがある。したがって、現状で

はどれが592帖に相当するのか、確認するのは困難であり、「591帖、残欠2帖・2巻」を員数とせざるをえない。ただし、残欠として経典名不詳とされた2帖・2巻のうち、2帖は「中阿含経卷第十六」断簡と「仏説聖宝蔵神儀軌経」、2巻のうち1巻は「解脱道論卷第四」であることが判明した。

#### ②散逸の時期

鵜飼徹定(1814~1891)が諸方の所蔵する古写経を調査し、文久3年(1863)12月に刊行した『古経題跋』には、園城寺所蔵分として15帖の尊氏願経があげられている。しかし、現在、これらのうち13帖は寺内に存在せず、うち「根本説一切有部毘奈耶雜事卷第四十」は大正4年(1915)11月の時点で天龍寺の所蔵するところとなったことが確認できた。また、五島美術館が所蔵する「光讚般若波羅蜜経卷第四」には、明治17年(1884)8月に園城寺から探し求めた旨が記される。したがって、寺外への大きな流出は、明治時代はじめごろにおきたと結論づけるにいたった。この時期は、急激な欧化主義の導入、全国的な廃仏毀釈などにより、多くの寺社から文化財が流出しており、園城寺もその波に抗しきれなかったと考えられる。

#### (2) 書写と地域

尊氏願経にかぎらず、一切経はおおよそ10部をひとかたまりとして帙に収納し、各帙の経典には識別を可能にするため、千字文が付される。(1)で確認できた798帖に割りふられる千字文は、

玄・呉・列・寒・来・秋・収・蔵・余・  
成・律・雨・霜・金・出・号・闕・珠・  
称・夜・光・莫・珍・李・奈・菜・重・  
芥・薑・海・鹹・河・淡・鱗・潜・羽・  
翔・鳥・字・伐・臣・邇・耄・鳳・蓋・  
恭・養・靡・使・器・行・徳・空・谷・  
伝・聴・悪・福・非・宝・深・夙・似・  
流・映・容・辞・篤・美・益・殊・礼・  
別・上・下・母・儀・猶・気・交・投・  
分・惻・義・廉・匪・心・守・真・逐・  
堅・二・背・涇・写・鼓・通・承・聚・  
杜・稟・隸・羅・侠・封・八・家・高・  
冠・陪・世・富・車・駕・肥・輕・勒・  
溪・伊・阿・奄・營・桓・公

の124帙分となる。これらは経典に記された奥書を検討すると、基本的には1帙、ないし複数帙を一単位として、その書写をひとつの寺院・個人が担当していたことが判明する。本研究により、書写を担当していたことが明らかとなったのは、以下に掲載した62の寺院と個人である。

#### (京都近郊)

金台寺・天龍寺・臨川寺・建仁寺・東福寺・泉涌寺・大覚寺・東北院・速成就院・真如寺・法金剛院・安国寺・万寿寺・悲

田院・大光明寺・法勝寺・等持寺・桂宮院・広覚寺・華開院・南禅寺・園城寺・法観寺・松田貞秀・普門寺・某寺・長福寺・西禅寺・永円寺・大徳寺・遍照心院・山階寺・四恩院・興福寺・東大寺・神護寺・成身院・鹿山寺・高山寺・実乗院  
(鎌倉)

建長寺・円覚寺・寿福寺・浄智寺・禅興寺・浄妙寺・長勝寺・宝興寺・延福寺・大休寺・極楽寺・蓮華寺・浄光明寺・興聖寺・宝樹寺・慈恩寺・承元寺・常福寺・理智光寺・覚園寺・楞嚴寺・崇寿寺  
圧倒的に禅宗と律宗の寺院が多く、『仏観禅師語録』における此山妙在の序文に「特命天下禅律教僧、書写毘盧大蔵尊經五千余卷」とあるのに符号する結果となった。

つづいて、62の寺院および個人を、さきの千字文の配列にプロットすると、124 帙のうち「玄」から「背」までは金台寺より実乗院、「涇」から「公」が建長寺より崇寿寺という具合に、書写の分担が京都近郊と鎌倉で、はっきり区別されていたことが確かめられる。さらに、分担の境界をより正確に知るため、千字文の「背」から「涇」のあいだに、どのような経典が配されているかを調べると、「芒」と「面」は「舍利弗阿毘曇論」および「五事毘婆沙論」、「洛」と「浮」は「鞞婆沙論」および「三弥底部論」、「渭」は「分別功德論」から「異部宗輪論」、「扞」は「仏所行讚経伝」および「仏本行経」となる。これを一切経の構成からみると、「渭」までは「声聞対法蔵」、「扞」からは「賢聖伝記録」に位置づけられており、京都近郊と鎌倉における書写分担の切れ目は、「渭」と「扞」のあいだであると考えらるにいたった。

### (3) 書写と形態

尊氏願経における(2)で検討した書写地の違いは、そのまま形態上の差異にもあらわれている。たとえば、各経典には奥書につづき、

発願文

願書蔵経功德力	世々生々聞正法
頓悟無上菩提心	登仏果位酬頓悟
後醍醐院証真常	考妣二親成正覚
元弘以後戦亡魂	一切怨親悉超度
四生六道尽沾恩	天下太平民楽業

文和三年甲午歳正月廿三日

征夷大將軍正二位源朝臣尊氏謹誌

という一切経書写の狙いを記した発願文が印刷される。ここには、

I 「頓悟」以下の1行を欠くもの

II 「発願文」の位置が低いもの

III 「発願文」の位置が高いもの

の3種類があり、I・IIは京都近郊、IIIは鎌倉で用いられたことが知られる。しかし、原本を丹念に調査した結果、これらの発願文は、

京都近郊では別紙、鎌倉では本紙そのものに摺写する点が新たに明らかとなった。

加えて、表題に記される「以」字点、経典を書写するさい生じる半面分の余白の有無も、書写地を判定する基準たりうることが判明した。具体的には、「以」字点がある場合は京都近郊、なければ鎌倉、半面分の余白がある場合は京都近郊、なければ鎌倉となる。こうした基準の追加は、奥書や発願文が欠損していても、書写地を推定することが可能なため、重要と認められる。ただし、「実相般若波羅蜜経」および「雑阿含経」は「以」字点がなくとも京都近郊の書写である点、「撰集百縁経卷第一」から「法苑珠林卷第三十一」までは半面分の余白があっても鎌倉における書写である点は、例外として把握しておかなければならない。

### (4) 書写と底本

尊氏願経は折本を帙表紙で包むという、やや特殊な装幀となっている。同様の装幀は、文和5年(1356)から応永15年(1408)ごろにかけ、鎌倉扇ヶ谷にある智岸寺の僧・智感を中心に版行された大般若経600巻、いわゆる「智感版」をはじめ、日本においては南北朝時代から室町時代にのみ出現する。こうした方法は、中国・宋や元の版本にみられるため、書写にあたってはこれらを底本として用いたのは確実といってよく、「正法念所経卷第四十」と「金剛薩埵説頻那夜迦天成儀軌経卷第二」には版心の部分そのまま書写されることから裏付けられる。この点をより詳細に知りうる材料となるのが尊氏願経に記された刊記、千字文、刻工名である。

まず、刊記についてみると、「大智度論卷第十九」は、首題のまえに「福州東禅等覚院住持伝法賜紫智華与僧契璋等謹募衆縁恭為今上皇帝 太皇太后 皇太后 祝延 聖寿 国泰民安開鑿大蔵経印板一副計五百余函 元祐六年正月日 謹題/住北華嚴沙門方蘭 謹発誠心恭為連江永安開山法門前亡後化/泊土地大王并真君大王等神泊院開山前後住持和尚并/前亡後化及土地興聖大王茄藍内一切聖衆捨錢開徳字函第九卷」(／は改行をしめす)、「根本説一切有部毗奈耶雜事卷第三十一」は、おなじく首題のまえに「福州東禅等覚院住持伝法沙門 智賢謹募衆縁恭為今上皇帝祝延 聖寿闔郡官僚同資禄位 雕造大蔵経印板計五百余函 時元符元年七月日 謹題」とある。元祐6年(1091)・元符7年(1104)ともに北宋時代の年号で、「福州東禅等覚院」と記されることから、底本のひとつに北宋の東禅寺版があげられる。ただし、「大智度論卷第十一」および「大智度論卷第十六」には、南宋時代に東禅寺版板木の改板費用を寄進した「広東運使寺正曾疆」の名がみえるため、再雕本の可能性を考

えなければならぬ。

また、「放光般若波羅蜜多經卷第十一」は、音義のあとに「大藏經局伏承 崇徳県永新郷念柴都口朱寂照庵住持比丘道枢謹施淨財刊開／大藏經板壹卷功德祝扶／壬申本命逮生星天照臨乾象所祈身位安泰壽等延洪者／至元十八年二月 日杭州路南山普寧寺住釈道安 題」とある。至元 18 年（1281）は宋時代ではなく元時代の年号で、「南山普寧寺」と記されることから、元の普寧寺版も底本として用いられたといえる。

ついで、底本を千字文から検討すると、「世」の付された「御製秘藏詮卷第十一」以降は、東禪寺版と普寧寺版だけでは説明しきれない。というのも、東禪寺版は經典に割りふられる千字文が異なるうえ、「宋高僧伝」と「大般涅槃經（南本）」が存在せず、普寧寺版は千字文こそおなじだが、「御製秘藏詮」は存在しないからである。かような矛盾を解くためには、別の底本があったと考えるほかなく、ここに思溪版の存在を想定しうる。この推測を補強するのが刻工名で、「摩訶般若波羅蜜經卷第十四」に記された「楊茂」、あるいは「光讚般若波羅蜜經卷第三」に記された「十六紙崔」などは、思溪円覚禅院版とよばれる前期思溪版にその名を見いだすことができる。

総じて、尊氏願經の底本は再雕本と考えられる東禪寺版・前期思溪版・普寧寺版という三版の混合蔵とみるべきであり、こうした指摘は本研究によりはじめてなされた。

以上、(1) から (4) をまとめると、まず、尊氏願經は文和 3 年の作成当初、5500 帖ちかくあったが、現在では四散し、798 帖が確認される。ついで、これらに残された情報を書誌学的に検討することにより、

- ・底本は再雕本と考えられる東禪寺版、前期思溪版と普寧寺版の混合蔵である点
- ・62 の寺院、個人が作成に関わる非常に組織だった書写である点
- ・書写は京都近郊と鎌倉で明確に分担されていた点
- ・書写地の違いは形態上の差異となっており、その判断基準として発願文と料紙、「以」字点の有無、半面分の余白の有無がある点

を指摘した。請来された經典をそのまま用いるのではなく、日本において組織的に書写しなおしたところが尊氏願經の最大の特徴といえるだろう。さらに、第 2・3 点目は室町幕府の寺院統制、地域政策にまで話題がおよぶため、当該期における一切經の輸入といった対外交流の問題とあわせて、今後、歴史的な視野からの言及も可能となり、写經にとどまらないより学際的な研究を大いに期待しうる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔図書〕(計 1 件)

羽田聡『〈報告書〉足利尊氏願經の原本調査を中心とした中世一切經の資料的研究』(真陽社 2013 年、200 ページ)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

羽田 聡 (HADA SATOSHI)

独立行政法人国立文化財機構京都国立博物館・学芸部企画室研究員

研究者番号：30342968